

気象災害 農業団体が対策本部 調査、政策要求へ

2016年8月24日

今夏の天候不順や台風による農業被害を受け、ＪＡなど農業関係11団体が24日、災害対策本部を立ち上げた。気象災害では冷害に見舞われた1993年以来の設置。被害状況の把握と国などへの政策要求を進めるとともに、本格的な収穫シーズンに向けて営農対策に取り組む。



農業関係11団体の代表が集まった災害対策本部の初会議

対策本部は十勝地区農協組合長会や十勝農協連、十勝総合振興局などで構成し、「十勝管内農業関係組織 平成28年度異常気象災害対策本部」と命名。農協連ビルで午前11時から開かれた初会議には11団体の代表が集まり、本部長に同組合長会の有塚利宣会長が就いた。有塚本部長は冒頭あいさつで「異常事態が発生している。行政と一体になって現場を掌握し、組合員の健全な経営再建に尽力したい」と語った。

管内は6月以降、天候不順や過去に例のない年間3度

の台風上陸に見舞われた。帯広測候所によると、6月の降水量は管内観測地点のほとんどで平年の2倍以上となり、新得や鹿追など8地点で観測記録を更新。7月中・下旬はほとんど日照がなかった。

このため小麦は開花期の天候不順により、「収穫量は平年を下回り品質も厳しい状況」（ホクレン）。多雨多湿でジャガイモの腐敗や豆類の生育不良などが懸念されている。台風ではスイートコーン倒伏や畜舎損壊などの被害が出た。被害や成育の遅れは管内全域で発生している。

本部では各ＪＡなどを通じて実態把握を進め、面積や被害額などをまとめる。政策要求では共済の対象以外の作物にも国の収入保険の適用を求めることなどを想定している。

十勝農業改良普及センターを中心に、今年の天候に沿った農家の営農対策に力を入れる。

会議後の会見で有塚本部長は「農家は昼夜を問わず人事を尽くしている。悪かった作物にはしっかり対策を取り、これから収穫が始まる秋物は少しでも被害が少なくなるように支援したい」と語った。

【緊急ルポ 農業被害現場に行く（上）】

2016年9月4日

「畑が河原になった」 耕土が流出 作物は露出 出荷絶望、ぼうぜん

【芽室・帯広】台風10号による豪雨は、秋の収穫前の十勝農業に大きな被害をもたらした。各地で圃（ほ）場が冠水し、河川の氾濫や堤防決壊によって土ごと作物が流された畑もある。被害に遭った現場を歩き、畑作農家や酪農家の声をリポートする。

「イモ畑が川になり、砂漠になった。一瞬ですよ、一瞬で」

芽室町南2線の農家瀬川幹生さん（35）の畑は、近くの芽室川の堤防決壊で、ジャガイモ畑8.3ヘクタールの大半が表土ごとえぐり取られた。残った畑の多くも浸水し、土が流れ出た後にイモが露出している。

8月31日午前2時ごろ、自宅で寝ていた瀬川さんは、突如「ゴオー パッシャー」という音に妻の恵理子さん（34）と目を覚ました。住宅2棟、倉庫3棟に川の水が流れ込んで床下浸水。敷地全体が水に漬かった。4歳と2歳の幼い子どもと共に救助され、避難所で一夜を過ごした。

翌朝戻って見た畑の無残な姿に立ち尽くした。祖父の代から作物と同じくらい丹精込めて作ってきた土だった。緑肥や堆肥を加え、硬い土を粉砕して作土を守り続けてきた。今年の天候不順で小麦は不作だったが、ジャガイモは長雨の合間を狙って防除に努め、順調で疫病にもかからなかった。秋を迎え気温が下がり、イモが肥える時期を迎えるはずだった。

川水に流されなかったイモはあるものの、水に長く漬かると腐り始める心配がある。露出したイモには土をかけて緑化を防ごうと考えたが、出荷は絶望的だ。「農家をやっていて一番悲しい。収穫を前に自然災害で畑一面つぶされた」